

かわらいせき 川原遺跡

—天竜川下久堅地区築堤関連—

所在地および交通案内: 飯田市下久堅知久平 1993-1

ほか

中央自動車道飯田 IC から東へ約 7.0 km

遺跡の立地環境: 天竜川左岸の氾濫原に延びた微高地に位置する。標高約 383m。

発掘期間: 2016 年 8 月 24 日～12 月 22 日

調査面積: 1,705 m²

検出遺構: 竪穴建物跡 10 軒、土坑 10 基、遺物集中 1 基

出土遺物:

土器: 縄文時代中期後葉・後期初頭・後期前葉・後期中葉土器、弥生土器、須恵器、灰釉陶器、中・近世陶磁器

石器: 縄文時代～石鏃、削器、打製石斧、横刃形石器、石錘、磨石、敲石、石皿、台石、石剣
弥生時代～磨製石鏃

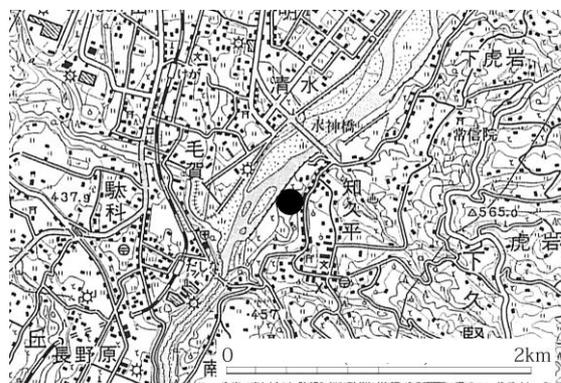


図1 川原遺跡の位置 (1:50,000)

発掘調査成果の総括

1 天竜川左岸の微高地上に営まれた縄文時代中・後期のムラ

東側の丘陵から北西方向に延びた微高地の両端は、近世以降の天竜川起源の洪水砂が厚く堆積し、遺構・遺物はなかった(図2)。微高地上では、竪穴建物跡 10 軒、集石 1 基、土坑 10 基を確認し、竪穴建物跡は、縄文時代中期後葉 4 軒、後期初頭 1 軒、後期前葉 4 軒、後期中葉 1 軒と変遷する。重複関係もあり、各期 1～2 軒程度の竪穴建物が存在していたと考えるが、各期における竪穴建物同士の同時性については未検討である。遺物量を加味すると、後期前葉の時期の活動痕跡が最も顕著である(図5)。

竪穴建物跡は、不整円形、長楕円形、隅丸長方形と形状は様ざま、大きさも長軸 3 m 未満から 4 m を超えるものまでである。時期別にみると、中期後葉の 4 軒は長軸 3 m 未満の不整円形のものが主体となり、4 m 近い大きさの隅丸長方形のものも存在する。後期に入ると不整円形でやや大きくなるが、前葉では長軸 3 m 未満と 4 m 以上の長楕円形ないし

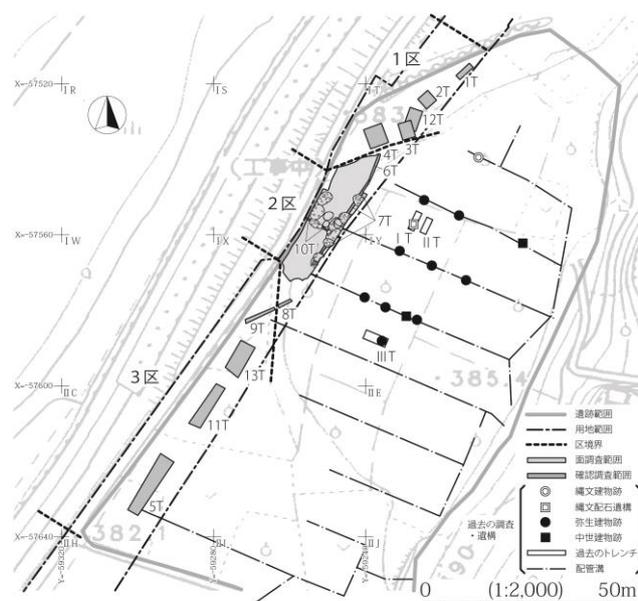


図2 川原遺跡全体図(過去の調査区と遺構含む) (1:2,000)

は隅丸長方形プランの建物が対となって存在していた可能性がある。中葉は前葉の大きなタイプの流れにつながる。どの時期の建物跡も、床面は貼床がなくやや固い状態で、炉跡はないか、あっても焼土等が明確に確認されていなく、出土土器も少ない状況であった。その要因について解明するには至らなかった。

2 川原遺跡出土の土器・石器

出土した縄文土器は、後期前葉の堀之内1式を中心に、その前後の時期の土器群も出土しているが、ほとんどが破片資料であり、型式や時期が不明なものも多い。时期的な特徴は、中期後葉が唐草文土器を中心に加曾利E系が混入する在地色の強い時期であり、遺跡の中心的な時期である後期前葉に入ると関東的な要素が強くなり堀之内1式が大半を占めるようになる。続く後期中葉は、東海地方の「蜷塚Ⅲ式」に比定される東海地方的要素（巻貝条痕の模倣）を持つ土器が確認できたことは特出される。この時期には、飯田・下伊那地域の土器に、東海地方の土器の影響が及んでいたことがうかがえる。

調査で得られた石器・石片類は853点である。このうち、器種分類した石器は350点、そのほか石片類が503点となった。石器の出土状況は、竪穴建物跡160点、遺物集中39点、土坑27点の計226点が遺構内で、ほか124点が遺構外である。石片類は、竪穴建物跡S B01・03・06・07・09、遺物集中SH01でそれぞれ40点以上を数えた。利用している石材は、打製石斧、横刃形石器、削器等が砂岩系や緑色岩系を多く用いていた。石片類も同様に砂岩系や緑色岩系が多くみられた。なお、黒曜石は58点と石片類の1割ほどと少ない。このようなことから、砂岩系や緑色岩系を素材とした打製石斧、横刃形石器、削器等の石器製作を想定して、検討を進めた。その結果、石片類は3つの大きさに分けられ、石器製作の際に出る残滓および素材となる大きさの石片を抽出した。それらはほとんど、天竜川の川原で見られる石材の加工品である。なお、出土石器のなかに石錘が26点ある。大・中・小形と大きさを作り分けて、漁労等が行われていた可能性を考える（図3・4）。

3 まとめ

川原遺跡は、1969・1981年に調査が行われた今回の調査範囲の東側では、弥生時代の建物跡が確認された（図2）。今回、その西側で縄文時代の集落跡が出土した。遺構は重なりあい、縄文人は断続的にこの地を訪れ、天竜川の氾濫原に延びる微高地上まで居住域として利用していたことがわかった。しかし前述の竪穴建物跡の状況を考えると、川沿いという立地を活用した、キャンプ地的な集落の建物であった可能性がある。ただ、管見の限りにおいて比較する類例がなく、明確な根拠を示すことができなかった。本集落の性格は、今回確認し切れなかった遺跡の類例、さらには遺跡東側の未調査部分からの情報を得ることによって解明されることを期待する。

出土した縄文土器は少量であったが、後期中葉に時期に東海地方の影響を受けた土器を見出すことができた。今後、今回は行えなかった周辺遺跡の遺構・遺物の型式学的な検討をすることによって、他地域との文化的交流の解明にまでつなげられればと考えている。

集落では、天竜川沿いという立地条件のなか、目の前を流れる天竜川で石錘を用いた網漁を行い、さらには石器製作のため、川岸での原石の粗割のあと、手頃な石核または素材剥片を遺跡内に持ち込み、刃部調整等の部分的な調整加工を行っていたと推測している。ただ、石器と石片類の接合関係がみられなかったため、1点1点の石片がどの器種のものかまで照合することができなかった。今後、天竜川の集落で、石器と石片類の詳細な照合分析によって、石器製作過程の具体的な姿を提示することが課題である。

飯田・下伊那地域では、縄文後期集落跡の調査例が少なく、今回の調査成果が遺跡立地、遺構、遺物ともに新たな事例となった。将来的には、資料の増加により、本遺跡も飯田・下伊那地域の縄文後

期集落の一形態として位置づけられることとなろう。

天竜川は、今現在も勢い衰えず太平洋に向かって南流している。水面には舟下りの歓声が上がる。悠久の縄文人の生活にとっても、天竜川はかけがえのない存在だった。そして、後世人々はその勢いを恐れ、そして苦しめられもしたが、現在もその存在は欠かせない。今回の調査成果が、現在・未来の天竜川と人びとの関わりを考える上での一助となればうれしい。

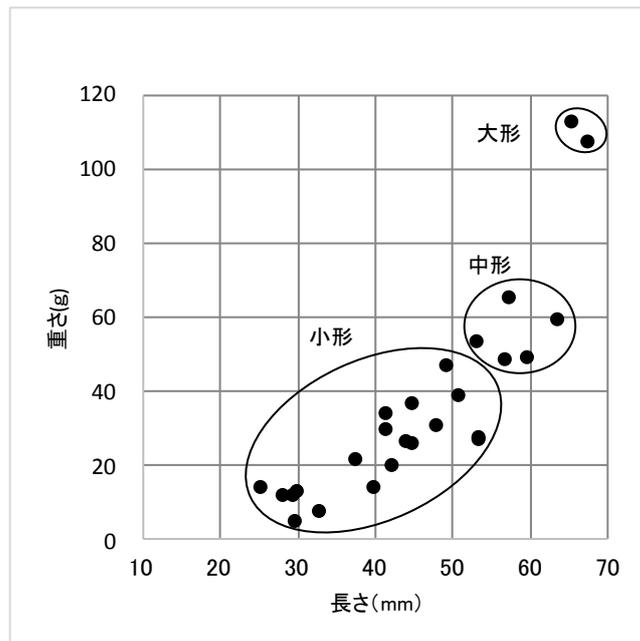


図3 石錘の重さと大きさ

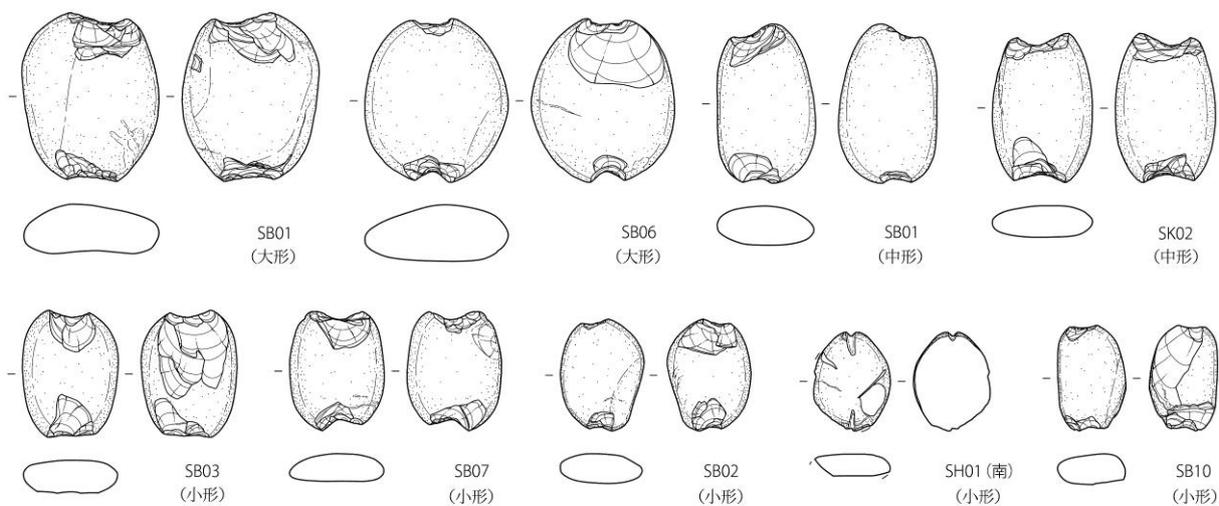


図4 川原遺跡出土石錘 (1 : 3)

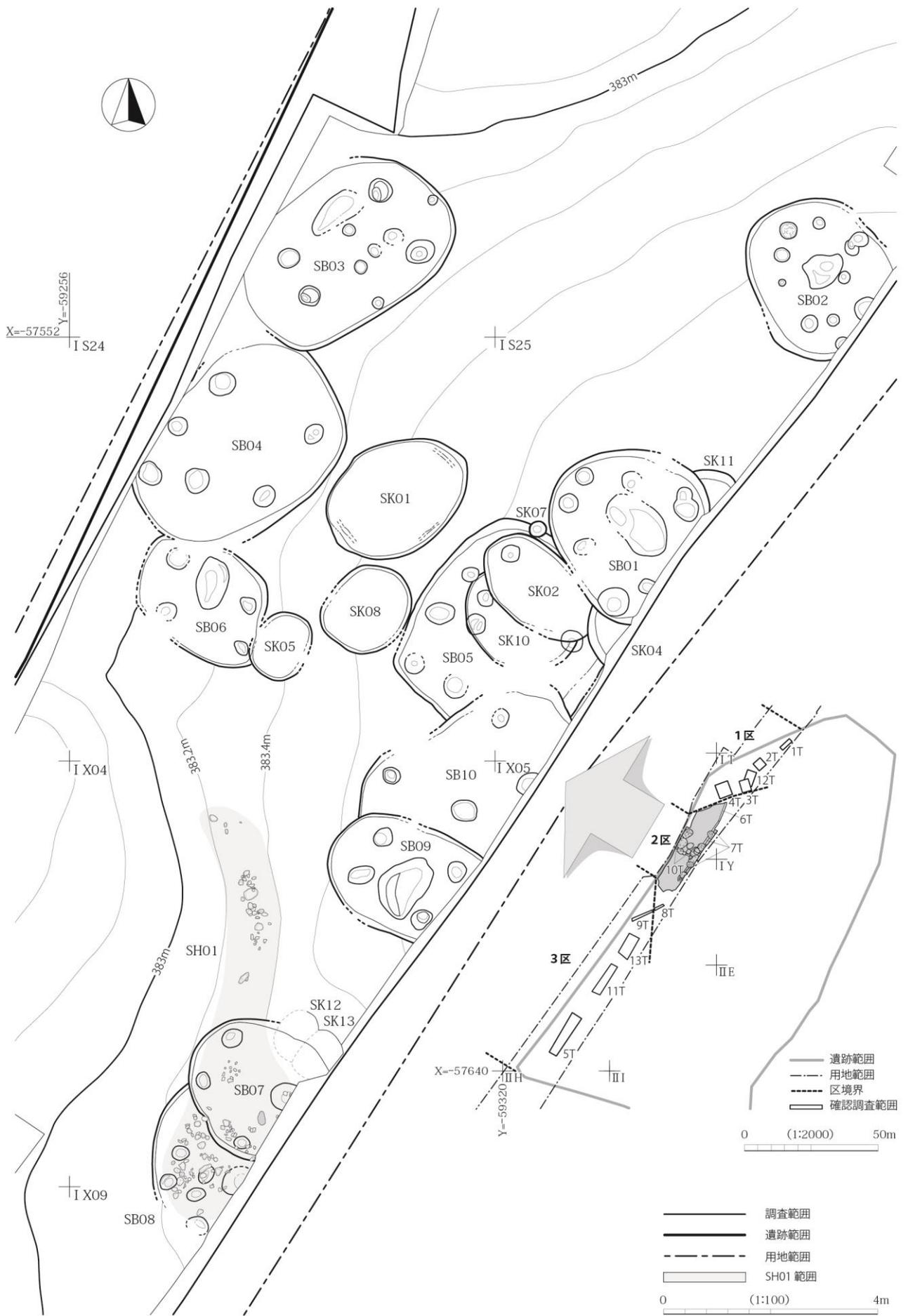


图5 川原遺跡2区全体図 (1:100)